

講

評

評価委員 東 洋
(白百合女子大学)

本研究がすぐれた成果と広い学際協力の実をあげて、3年の期間を有意義に完結されたことをまずお祝いしたい。それ以前にも6年にわたる協同研究をつづけて来られて来たということで、通算9年にわたる大きなプロジェクトだったと考えてよいと思う。

学際研究がとかく育ちにくいわが国において、神経生理学、小児科学、産婦人科学、保健学、家政学、児童福祉学、社会学、実験心理学、発達心理学から電気工学にまでわたる研究班が9年間にわたって協力して研究がすすめられたというのは、それだけですでに大きなことで、今後の家庭及び児童の研究にすぐれたモデルを示したものと言えよう。

しかも、評者がかかわらせていただいた過去3年の間だけを見ても、異った専攻間での問題意識の共有化がすすみ、発想、方法、用語などに関する相互理解も進んだ。本研究のように人間社会の実際的な問題と絡み合いの多い課題を研究するためには、発想や方法の差異を受容しながら相互の学問的な理解とコミュニケーションが可能な研究文化が必要である。本研究は、個々の研究をすすめながら同時にそのような研究文化の形成に貢献して来たといえよう。

もちろん、ひとつひとつの研究がそれ自体すぐれた業績となっている。広い範囲にわたる諸専門について判断するのは私の能力をこえることであるが、心理学に限って考えても、母子関係に関してわが国におけるもっとも重要かつ高水準な研究集団であるといえる。特に、グループ自体の中に異った専門の人々をふくむ学際グループに属する心理学者の中には、他専門からの刺激を通じて新しい方向から心理現象にとりくむ人々も育ち、いわば個人内学際性とでもいうものが形成されて来ているように思う。

たゞ、注文をいうならば、このように学際協力の基盤が形成されたものの、研究成果についてのグループ間のコミュニケーションはまだ充分だったとは言えない。地域的な分散や、時間的な制約の故だと思うが、コンピュータネットワークなどを活用して更に効果的な情報交流をおこなう努力をすべきではなからうか。

これまでの基礎ができたのであるから、次の段階としては、より明確に焦点化した課題設定をし、ひとつの問題の解明にさまざまなアプローチで協力するという面を強調すべき段階に来たと思う。それによって、たゞそれぞれのグループがそれなりの成果をあげながら交流するというのとゞまらず、子どもの心身の発達と福祉に貢献する具体的かつ総合的な知見が結実することを期待したい。

このような学際総合活動には、それが学界の文化となって定着するまでの間は、継続と増殖が大切である。さもないと、個々の仕事から個々の専門分野におくりかえされる成果はとにかくとして、総合研究活動をきづき上げた努力は、単なるエピソードとなってしまふ。その意味で、このような課題に関して学際協力が常識となるまで、次々と総合研究が積み重ねられることを期待する。

最後に、これだけのすぐれたかつ個性の強い研究者を組織して来られた高石、小林先生ならびに総括事務局の労に感謝したい。